

— 序 説 —

心躍る感覚を次世代が経験する学術集会を目指して

金井 浩

(日本超音波医学会第93回学術集会 会長)
東北大学 大学院 工学研究科 / 医工学研究科 教授

日本超音波医学会は、設立当初より、医学と工学、基礎と臨床、学術と機器メーカー、医師と検査士が連携し、さまざまな臨床領域において超音波による診断と治療に関する研究開発・臨床応用を行ってきた。本学会が、各臨床領域の他学会に埋もれず、新しい概念・革新的技術などを持続的に創出して発展するには、これらのさまざまな連携の深化とともに、優れた「次世代研究者」の育成が必要と考える。

そのため、学術集会では、最新の医学情報の収集や新規開発された装置の評価という即効性の高い研究発表だけでなく、一旦解決されれば大きな価値を生むであろう研究課題を発見し、長期間掛けて挑戦しようとする研究発表も重視されるべきである。こうした研究発表の「心躍る感覚」と次世代が経験する「場」を作ることが大切である。実現は容易ではないが、ここに本学術集会の主題の「原点回帰」の意味がある。

多くの学問領域がそうであるように、黎明期には面白い研究の種が至るところにあり、研究者は「研究の面白さと蘊奥」を理解し、それらを日夜励む「原動力」にしてきたと言える。しかし、学問領域が成熟期に入って、挑戦的要素と学問の魅力が減っているように見受けられる。しかも黎明期をご存知の研究者の多くが定年を迎え、学会にとって今後は予断を許されない重要な時期と言える。

これだけ科学技術が発達しても、生体には人知の及ばぬことがまだ無限にある。その生体の奇跡の仕組みを解き明かす精緻な超音波計測や診断の研究も、生体の仕組みに積極的に働きかける超音波治療の研究も、次代を担う研究者に強い「動機付け」を与える。発展著しい人工知能、デバイス技術に基づくエコー装置の小型化の研究なども、学術の裾野拡大に繋がる。

本学術集会の主題「原点回帰」には、「学術集会の本来の意義」を見つめ、研究発表と熱心な討論を尊重する「学術重視」が、次世代への「動機付け」と学術や医療の持続的発展には不可欠との狙いがある。

したがって学術集会の最重要点は、「一般演題」の「生の発表・生の討論の場」を整え、発表のステイタス向上にあると言える。そこで、①特別企画を独立させず、各分野の一般セッションに「招待講演」として組み込み、一般演者も同セッションで発表する場を設定する。②一般演題の持ち時間を長く設定する。③座長による数分間の「基調講演」を設け、そのセッションの目的や現状を、他分野の方も理解できるよう目指す。④査読によって面白いと判断された一般講演を「注目講演」として倍の持ち時間を割り当てる。⑤工学系・臨床系がともに発表し討論できる「合同セッション」を多く設ける。⑥展示会やランチョンセミナーに「基礎研究に必要な研究機器」提供メーカーの参画も促す。

こうした古くて新しい取り組みによって、次世代の優れた研究者が育ち、やがて優れた学術が持続的に発展することを期待している。

なお本学術集会は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、2020年12月1～3日に延期して開催することになっている。